

宗教文化の可能性と東アジア人類学の課題

—— 韓国における「無教会主義」の活動を中心として ——

Possibility of religious culture and Issues of Cultural Anthropology in East Asia: A Case Study of the Non-church Christianity's Activities in Korea

陶 冶*

TAO Ye

谷 部 真 吾**

YABE Shingo

(要旨)

内村鑑三によって始められたキリスト教の思想運動である「無教会主義」は、現在日本のみならず韓国や台湾でも実践されている。本稿では、「無教会主義」の実践が朝鮮半島でいかにして開始され、その後、現在に至るまでどのような活動を展開してきたのかを明らかにする。また、日韓の「無教会主義」関係者たちの交流に着目し、そうした宗教文化交流がいかなる可能性を秘めているのかについても指摘する。

朝鮮半島における「無教会主義」は、1920年代に、内村の思想に感銘を受けた留学生たちによって始められた。当時、朝鮮半島は日本の植民統治下にあり、「無教会主義」運動を始めた朝鮮半島の関係者たちは、その独立を唱えていた。やがて日本の敗戦で第二次世界大戦が終結すると、韓国も国民国家の建設に取りかかることとなる。そうした中、1964年に日韓の「無教会主義」関係者たちの関係に大きな変化が訪れる。この年、日本の関係者たちが「謝罪」のために韓国を訪問し、翌年には韓国側から日本への答礼訪問が行われたのである。これを契機に、両国の「無教会主義」コミュニティは交流を深め、その親交は現在でも続いている。本稿では、こうしたプロセスを詳細に明らかにすることで、ポストコロニアル時代に向けた新たな思想・実践の可能性について指摘していく。

1. 問題提起

本稿では、内村鑑三によって創始されたプロテスタント・キリスト教の宗教思想運動である「無教会主義」が¹ (赤江2013)、日本の植民統治下にあった朝鮮半島にどのようにして伝わり、その後、現在に至るまでどのような活動を展開してきたのかを明らかにする²。また、朝鮮・韓国の「無教会主義」の人々が、日本の関係者たちとの間で続けてきた交流に

注目し、こうした信仰をともにする人々の交流の可能性についても考察していく。

日本と朝鮮・韓国に関わる近現代の出来事を分析する場合、1910年の日韓併合以降、日本が朝鮮半島を植民統治下においていたことを無視することはできない。ナショナリズムを切り口として朝鮮の近現代史を分析した木宮正史によると、1910～45年までの朝鮮近代史は、これまで日本の植民地支配とそれに抵抗する独立運動の歴史として語られることが

*山東大学哲学与社会発展学院副教授 (Associate Professor, School of Philosophy and Social Development, Shandong University, China)

**山口大学大学院東アジア研究科准教授 (Associate Professor, Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University, Japan)

多かったとしている（木宮2018）。その際、日本の植民地支配に協力した側とそれに抵抗した側とに色分けされて、論じられてきた。このため、当時の朝鮮半島のナショナリズムは、日本の支配を認めず抵抗するという「抗日」ナショナリズムしかなかったかのような印象を受けてしまうが、それだけではなかったと木宮は指摘する。一旦、日本の支配を受け入れた上で、それを利用しつつ中長期的な視野で独立を指向するという「用日」ナショナリズムも存在したという³。従来、そうした指向は「親日」とされてきたが、民族の独立を放棄していないという意味でナショナリズムといえるとしている。このような複数のナショナリズムの併存は、植民統治期のみならず独立後にも見られ、とりわけ韓国の対日ナショナリズムは「用日」と「抗日」の狭間を揺れ動いていた、もしくは使い分けてきたと述べている⁴。本稿で事例として取り上げる、日本発の宗教思想「無教会主義」が朝鮮半島に伝わり、活動を続けてきたのは、そうした時代背景においてであった。

2. 「無教会主義」運動の朝鮮半島での開始と変容⁵

2-1. 第二次世界大戦まで

朝鮮半島で「無教会主義」の活動が始まったのは1920年代であり、その当時、そこは日本の植民統治下にあった。朝鮮半島からの留学生であった金教臣、咸錫憲、宋鬪用らは、日本で開かれていた内村鑑三の聖書集會に参加し、キリスト教信仰とその愛国的思想に感化された。彼らは帰国後、1927年に同志6人で『聖書朝鮮』を創刊し、「無教会主義」活動を朝鮮半島で始めた。当時の聖書集會は主に個人宅で開かれ、金教臣は「京仁」地区（仁川とソウルの間）を中心に、また1931年に帰

国した宋鬪用は漢城（ソウル）郊外を中心に活動した。1942年、『聖書朝鮮』第148号の冒頭に掲載された「悼蛙」というタイトルの論考が、朝鮮半島の独立を主張する内容であったため、この雑誌は当時の植民地当局によって発行停止にされた。その上、主筆者であった金教臣や、彼の同僚、読者など12人は、1年間投獄されることとなった。この事件は「聖書朝鮮事件」と呼ばれている。

2-2. 第二次世界大戦以後

1945年に第二次世界大戦が終結すると、朝鮮半島は日本の植民地支配から脱した。ちょうどそのころ、塚本虎二のもとで宋鬪用とともに10年に渡って聖書を研究していた盧平久が帰国し、『聖書研究』を創刊するとともに、「無教会主義」の活動に携わるようになった。同じころ、咸錫憲が半島北部から南部へと移ってきて（このことを「越南」ともいう）、活動に加わった。戦後の朝鮮半島は、南北に分断されたことにより、「無教会主義」の活動は韓国に限定されることになった。1960年代以降、盧平久は、韓国の「無教会主義」の指導者といわれるようになった。彼は2003年9月に亡くなるまで、『金教臣全集』や『聖書研究』（500冊）を出版し、毎年夏（8月）と冬（12月）の2回、「無教会主義」の全国集會を開催し続けた。日本の「無教会主義」と同じように、韓国でも全国集會が今日まで開催され続けており、この国の「無教会主義」運動における最も重要な交流の機会となっている。

2-3. 現状と動向

21世紀に入ると、韓国の「無教会主義」運動には、さまざまな変化が見られるようになる。例えば集會は、個人宅で開かれる聖書集會から、多くの人々を集めて専門的な議論が

なされる聖書研究会まで、規模・質ともに多様化した。また、若い世代の責任者も台頭してきた。さらに、聖書集会や聖書研究会が開かれる地域も、以前のように「京仁」地区とソウル郊外ばかりでなく、より多くの地域で開催されるようになった。図1に示したように、ソウルと仁川の首都圏で活動する「無教会主義」団体は、梧柳洞、大方洞、仁川、YMCA、光明里、利川、水原などにあり、毎週日曜日に小規模な聖書集会を開いている。ちなみに、仁川では「聖書読書会議」と呼ばれる聖書集会の他に、毎週水曜日に関根正雄の著作を日本語の原文で読む集まりが行われている⁶。また、大都市圏以外では、大田、大邱、光州、全州、洪城などの地域でも聖書集会が定着している。それらの団体により、月刊誌、隔月誌、四半期誌などが刊行されており、合計7つの関連する聖書講習雑誌が定期的に発行されている。

3. 「無教会主義」における日韓の交流

3-1 「無教会主義」における日韓交流の概略⁸

(1) 朝鮮半島における「無教会主義」の開始

朝鮮半島における「無教会主義」は、主に内村鑑三の聖書集会に参加した留学生たちが、そのキリスト教思想を学び、帰国後、『聖書朝鮮』を刊行したことによって始まった。彼らの主な活動は、『聖書朝鮮』に内村の思想を紹介する論考を掲載することであった。当時、朝鮮半島の「無教会主義」の関係者が日本に赴くこともあったが、お互いの交流は主として関連する出版物のやり取りであった。

(2) 戦後における刊行物の相互執筆

第二次世界大戦が終わると、両国の雑誌に

図1 韓国における「無教会主義」集会の分布範囲⁷
(集会が開かれている地名を囲み線で表記している)



互いに関連した主題の論考を發表するといった活動が見られるようになった。日本では、例えば矢内原忠雄が金教臣を悼む文章を執筆し、雑誌『嘉信』1945年9月号に掲載された。

(3) 1964年以降の和解と交流の深化

また、1964年、すなわち日韓の国交が正常化される前年に実施された、政池仁を代表とする日本の「無教会主義」関係者たちの「謝罪」のための訪韓と、翌年に韓国の宋闘用が行った日本への答礼訪問により、「無教会主義」における日韓の交流は新しい段階に入った。これ以降、韓国の「無教会主義」の人々は、日本の「無教会全国集会」に参加するようになり、彼らの相互訪問と講演が地方の聖書集会でも行われるようになった。日本の「無教会主義」関係者たちはまた、日本の植民地統治時代、植民地当局によるクリスチャン殺害の賠償ために、募金キャンペーンを実施した。さらに、1975年に政池仁を中心とした日本の「無教会主義」の関係者たちは、蘆平久を中心とした韓国の「無教会主義」者たちと協力し、韓国の梧柳洞で聖書集会が開かれる場所に「梧柳文庫」を開設した。以降、今日まで、日本の関係者たちは「無教会主義」やキリスト教関連の日本語出版物を、「梧柳文庫」に寄贈し続けている。その意味で、この小さな図書館は日韓キリスト教徒の和解の象徴となっている。

(4) 1995年以降に見られる交流団体の組織化と脱宗教化

1995年に⁹、関根正雄と森山浩二を含む日本の「無教会主義」有識者5名は「日韓青年友の会」を立ち上げた。彼らは、「謝罪、相互理解、ホームステイの招待、お互いの思想学び(2006年に追加)」という中心的理念を提唱し、日本と韓国のクリスチャンによる密

な交流を促し、韓国の社会、文化、歴史に対する日本の若者たちの理解を深めようとした。こうした動きを受け、韓国側も2006年に「韓国聖書信友会」を設立した。信友会の構成員たちは、日本の「無教会主義」の人々、特に学生たちの訪韓を援助し、また定期的に韓国の若者の訪日を組織した。さらに、日韓の人的交流に関していえば、東京の「無教会主義」コミュニティの有志たちは「歴史学習会」を立ち上げ、日本と韓国の研究者を招き、「無教会主義」や植民地時代のキリスト教などについての講演会を開いたりした。

3-2. 交流のネットワーク

現在、日本と韓国の「無教会主義」コミュニティ間の交流は、4つに分類することができる。

(1) 聖書集会や研究会による図書や刊行物の交換

日本には、「今井館」という「無教会主義」に関連する資料の収集と保存を行う専門機構がある¹⁰。「今井館」ではまた、韓国の「無教会主義」の関係者や研究者、有識者などを招き、講演会も開催している。さらに、東京にある「高橋聖書集会」も、以前から韓国人研究者や「無教会主義」有識者を招いていたり、近年に設立された「歴史学習会」でも韓国や台湾と交流しようとする指向が顕著に見られたりもする。韓国では「梧柳文庫」が中心となって、主に日本から送られてくる関連書籍の受け入れを行っている¹¹。

(2) 日本の「無教会全国集会」¹²

日本の「無教会主義」コミュニティでは、毎年1回、日本各地を巡回する形式で全国集会を開いており、2018年は32回目となった。現在でも毎回200人以上の参加者があり、全

国集会の報告書が刊行されている。1980年代半ば以降、韓国と台湾の「無教会主義」の人々の参加が毎回見られるようになった。韓国・台湾からの「無教会主義」有識者たちは、全国集会でキリスト教や「無教会主義」、さらには社会的・政治的問題などについて発表する。この集会は、東アジア「無教会主義」コミュニティにおいて、最も注目される交流の場となっている。一方、韓国では、1953年8月に梧柳洞の夏の聖書集会として始まり¹³、その後、夏と冬の年2回開かれる聖書集会が、韓国での「無教会主義」の全国的なイベントとなっている。今日でも、毎回約50～60人の参加者がある。言語などの問題もあり、日本の「無教会主義」コミュニティからの参加者は、「日韓青年友の会」代表の森山浩二のような一部の人々に限られている。

(3) 系列学校と訪問制度

日本の「無教会主義」の学校およびその関連施設には、「基督教独立学園」、「キリスト教愛真高校」、「愛農学園」の3つの高校と、東京にある「春風学寮」と「登戸学寮」、さらに名古屋にある「言学寮」の3つの学生宿舎がある。それぞれ独自の運営理念と目標を持っているが、内村鑑三の「無教会主義」キリスト教思想の精神が重要な基盤となっている。韓国の洪城にあるブルム農業高等技術学校（後述）は、以上の日本の3高校と姉妹校の関係にある。相互に短期留学生を受け入れており、また修学旅行の制度も整えられている。

(4) 青年による相互訪問

日本の「日韓青年友の会」と韓国の「韓国聖書信友会」が中心となり、学生たちの相互訪問を組織し、また自国の聖書集会の構成員にホームステイに協力してくれるよう呼びか

けを行っている。

4. 韓国の「無教会主義」の活動に関する2つの事例¹⁴

4-1. ソウルの「大方洞集会」

「大方洞集会」は、ソウルの代表的な「無教会主義」集会である。そのメンバーの大半は70歳以上の定年退職者であり、毎週の集会に頻繁に出席する人々の中には、国立大学の名誉教授や企業の従業員などがおり、構成員は約20名ほどである。毎週日曜日の集会に加え、毎月1回、集会の後にディナーパーティーが催される。日曜日集会の会場は、地方自治体が開設した市民館の部屋を利用することもあり、運営は主に集会に出席するメンバーからの寄付で賄われている。近年、構成員たちは、日本と韓国の「無教会主義」団体を通じて訪韓してくる日本人学生たちのホームステイに積極的に協力している。以下に、「大方洞集会」の主要メンバーをあげる。

Kさん（男性、40代）

国際貿易会社のCEO。洪城ブルム農業高等技術学校を卒業し、日本の「基督教独立学園」に留学した経験もあり、英語と日本語ともに堪能。集会のリーダーである。また、「韓国聖書信友会」の幹部として、日本と韓国双方の「無教会主義」コミュニティにおける学生相互訪問の韓国側責任者を務めている。また、彼は、そのような訪問の密度を増すべきであり、さらにいえば、訪問の内容をもっとキリスト教にそったものにすべきであると主張している。

Sさん（男性、70代）

博士。国立ソウル大学名誉教授。韓国国立科学学術院の会員。集会の聖書講習のチー

フ。

Sさん（女性、年齢不明）

主婦。訪韓する日本人学生のホームステイを受け入れている。「日韓青年友の会」と「韓国聖書信友会」が主催する両国の学生の夏休み訪問の担当を、もっと若い世代の経験者に任せ、先輩によって開拓されたコミュニケーションの土台を長期間継続できるようにするべきだと提唱している。また、日本と韓国の学生に英語をもっと勉強させ、言語の壁を克服するようにするべきだとも主張する。

Cさん（男性）・Lさん（女性）、70代の夫婦
中学校教師を退職し、毎週日曜日の聖書集会に参加している。何度か観光で日本を訪れた経験があり、訪韓する日本の「無教会主義」団体のホームステイを積極的に受け入れている。

4-2. 洪城プルム農業高等技術学校

忠清南道（県）洪城郡（市）洪東面（町）にある「プルム農業高等専門学校」は¹⁵、「無教会主義」の2人の有識者によって1958年に設立された。そのうちの1人は、朝鮮半島北部出身の李贊甲である。彼は1948年に北から南に38度線を越えてやってきた。李は、学校の創設や理念などの提唱者であった。もう1人は、洪東村出身の朱鋈魯であり、土地の提供や創設に関する事務仕事を担当した。彼は、韓国の「無教会主義」コミュニティにおいて、「偉大な平民」と尊称されている。

プルム農業高等技術学校は、「共生平民」を校訓とし、「学校、キリスト教、農村」を一体とする理念のもと、教育と地域発展に力を注いでいる。1975年に、日本の「愛農学園」の校長でもあり「愛農会」の会長でもあった

小谷純一が訪問講義をして以降、有機農業に関する教育と実践を開始し、1979年にオランダのICCOの支援を受け、農場の建設と校舎の改築を行った。幼稚園も設立されたが、1980年に独立した。1983年に、ようやく正式な学校として、韓国政府教育管理部門に承認された。2001年にエコ農業専門学部が設立され、その運営とスタジアムなどの施設の増設に、道（県）政府からの補助を受けた。

2015年には、中学校に86人、短期大学に14人の生徒・学生がいた。生徒・学生の中で、洪城郡出身者は35%であり、その他は韓国各地から来ていた。短期大学専門部の学生の大部分は農業高等技術学校を卒業し、農業を生涯の職業とするために勉強をしている。

学校での生活は、「労働、学習、協力」を主要な内容としている。1977年に食品加工の協会が設立された。さらに、1993年には学校生活協同組合が設立され、村で生産された全麦粉のパン、有機農産物、その他の加工品などを販売する小売店がオープンした。

学校のカリキュラムは、約30%が農業実習にあてられている。キリスト教関連の授業は選択制となっている。また、キリスト教や「無教会主義」に関する読書会が、生徒・学生と教師との間で行われている。学校の大講堂では、毎朝夕、教師と生徒・学生全員が出席する定例の礼拝がある。大講堂では毎週日曜日に聖書集会も開かれ、主な参加者は学校の教師、近くの村人、生徒・学生の信者、さらに「無教会主義」キリスト教に興味をもつ生徒・学生たちである。

学校は、日本の「基督教独立学園」、「キリスト教愛真高校」、「愛農学園」の3つの「無教会主義」系の学校と姉妹関係を結んでいる。双方で、留学生の受け入れや修学旅行での行き来が行われている。

以下に、プルム農業高等技術学校に深く関

わる、韓国の「無教会主義」関係者をあげておく。

Hさん（男性、80代）

日本語が流暢であり、中国語も少し話せる。1960年にプルム農業高等技術学校に就職。地元の歴史学者であり、北東アジアにおけるキリスト教の歴史についての研究者でもある。日本の「無教会全国集会」に参加し講演した経験がある。東アジア諸国間の相互理解と平和共存には、まずキリスト教の寛容の精神のもとで和解すべきだと提唱する。韓国の「新村運動」を強く批判し、韓国の農村改革はキリスト教精神のもと、下から上へ、農民と地方政府が自主的に取り組むべきだと主張する。

Bさん（男性、60代）

東京大学大学院にて博士号取得。日本語・英語とも流暢。韓国の国立大学の教授を辞任した後、プルム農業高等技術学校に転職。日本の「無教会全国集会」に参加し演説した経験がある。韓国の農業開発、特に土地問題に関して、土地の大部分を大地主と大企業が所有しているのは、韓国農業の持続可能な発展における最大の障害であると主張し、国家に土地システムと所有権の改革を要求している。

Gさん（男性、60代）

洪洞村出身。プルム農業高等技術学校の卒業生。村の元代表。1990年代初頭に、アヒル農業法を開拓し、環境保護生態農業を提唱した。2000年に、道政府の特別政策顧問として、環境に優しい農村建設、特に村の建設100年開発計画の策定に参加した。

Sさん（男性、40代）

洪東村出身。プルム農業高等技術学校の卒業生。「韓牛有機飼育協会」の幹部でもあり、焼肉店の管理者でもある。Sさんの親族は中国の明代皇室の子孫であり、明代末に朝鮮半島に逃れてきたという。村の祠堂には家系図があり、その先祖を崇拝している。毎年、旧暦の正月に家族で祖先祭祀の儀礼を行っている。

Zさん（男性、30代）

洪東村出身ではないものの、プルム農業高等技術学校の卒業生である。村民の土地を借りて「青年共同農場」を設立した。共同農場は7人で運営されている。有機栽培で朝鮮人参や野菜を作る。また、政府機関からの依頼を受け、都市の人々の精神面での健康リハビリテーションの一環として、精神障害者の農業労働に協力している。さらに、日本や香港からのキリスト教団体の訪問も受け入れている。

5. 考察——活動の段階性と政治や社会への関与——

5-1. 朝鮮半島の「無教会主義」運動の容と日韓関係

朝鮮半島の「無教会主義」運動の展開は、重要人物の動向や特定の歴史的イベントに注目しても、あるいはキリスト教思想の傾向の違いに焦点を当てても、大きく3つの段階に区分するのが適切ではないかと思われる。3つの段階とは、すなわち「第二次世界大戦前および大戦中」、「第二次世界大戦後」、「新旧世紀の交差点」である。「第二次世界大戦前および大戦中」において、朝鮮半島北部と南部の「無教会主義」運動の重要人物は金教臣であったが、「第二次世界大戦後」になると蘆平久とその集団となった。21世紀に入ってからは、

以前のような象徴的人物がいなくなり、聖書集会や日韓交流団体といった組織を中心とした段階に入り、そうした状態は現在でも続いている。このような区分は、朝鮮半島の「無教会主義」運動の思想的傾向や、朝鮮半島における国民国家建設の過程もしくは近代化の過程と関連している。

また、「無教会主義」の日韓の交流に関しては、「開始」（1920年代～1945年）、「刊行物の相互執筆」（1946年～1963年）、「和解と交流の深化」（1964年～1994年）、「交流団体の組織化と脱宗教化」（1995年～）というように、4つの段階に分けることができる。韓国における「無教会主義」運動の展開と日韓の「無教会主義」コミュニティ間の交流という2つのプロセスは、朝鮮半島における日本の植民地支配の終了という歴史的出来事と密接に関係している。第3段階は、1964年に日本の「無教会主義」有識者が訪韓し謝罪したことによって始まったが、それは、ほぼ同時代であるとはいえ、1965年の日韓国交正常化に1年ほど先んじていた。同じように第4段階は、「日韓青年友の会」設立を契機として、日本と韓国のクリスチャンによる密な交流を促し、その結果、韓国側も2006年に「韓国聖書信友会」を設立することとなった。こうした双方向の人的交流は、より一層強化され、現在ではクリスチャンでない一般の学生にも拡大されるようになってきている。そうした動きは、1998年の韓国における日本の大衆文化解禁によって始まり、2000年代以降に本格化する日韓文化交流の前奏であったともいえよう。

5-2. 韓国の「無教会主義」関係者たちの政治への関与とその変容

朝鮮半島における「無教会主義」運動の広がりや、アジア・アフリカにおいてよく見られるような、植民地化に伴う布教の結果では

なかった。内村鑑三の思想に感化された留学生たちが帰国後に、その精神にもとづく活動を始めたことがきっかけであった¹⁶。彼らの初期の象徴的な出版物である『聖書朝鮮』のタイトルに注目してみると、「聖書」と「朝鮮」とが直接結びつけられており、その間に「と」という助詞がないことに気づく。これは、内村の「無教会主義」思想における2つの「J」（Jesus & Japan）の精神を継承したためであり¹⁷、内村の思想における「日本」を「朝鮮」に置き換えたものであった。朝鮮半島における「無教会主義」運動の創始者たちが、このような思想を抱いていたからこそ、上述したように『聖書朝鮮』に独立を主張する論考が掲載されたのであり、それによって1942年の「聖書朝鮮事件」は引き起こされたのである。このことからすると、朝鮮半島の「無教会主義」は、聖書を中心とした思想であり、ある意味での社会運動でもあったが、そこにはナショナリズムや反植民地主義（韓国では「反日」）の要素も含まれていたと指摘できる（Mullins1998）。

第二次世界大戦後、朝鮮半島では、「無教会主義」を含む多くのクリスチャンが北から逃れて南に移り住み、ソウルの近くで集会を立ち上げた。南北間の緊張が急激に高まった時期、特に1950年の朝鮮戦争後は、北朝鮮政権に批判的な社会的風潮と歩調を合わせるかのように、韓国のキリスト教会もその政治的指向を当初の「反日」から「反北」へと変更した。しかし、「無教会主義」は、韓国で軍事独裁政権が権力を握ったころ、国内事情には強い関心を示すものの対外関係への関心は薄い、という傾向を示すようになった。民族統一の実現を促す事業に関しても、韓国の「無教会主義」は、前世代の人々が持っていたようなナショナリズムと指導力を欠いているとされている（金2006）。

5-3. 社会・文化的運動として

その反面、韓国の「無教会主義」運動は、都市部と農村部との協調、農業の発展、学校教育の充実、環境と生態系の保護といったような社会事業に力を注いでおり、また韓国社会の民主化に関しても、地方と国との関係について地方の立場から社会的公正に至る道を模索している。このようなことを考慮すると、韓国の「無教会主義」は、時代の変化に対応しつつ、社会発展に貢献してきたといえる。

さらに、「無教会主義」における日韓の交流に関して、特に21世紀に入ってから「無教会」色が薄まりつつある。確かに、日韓交流に関わる韓国側の人々は「無教会主義」関係者に限られているが、日本側の人々は「無教会主義」関係者だけでなく、しかもクリスチャンだけでも、学生や研究者などの知識階層だけでなく、会社員などの一般市民も含まれるようになってきた。それは、日韓「無教会主義」の交流が、初期の関係者や知識階層に限定された状態から市民階層にまで拡大し始めたことを意味している。しかも交流の主題も、このような変化を反映して、宗教思想を中心としたものから、より一般的な内容（例えば、相互の歴史観や異文化理解についてなど）になりつつある。

6. 結びにかえて

東アジア各国は、国家や集団の秩序を尊ぶ儒教文明や官僚国家システムという共通性を古くから有していたが、近代化の過程における植民地経験には差異があり、また各国の近代国民国家の建設プロセスも異なっていた。そうしたこともあり、ときに隣国と自国とを強く意識することでナショナリズムが顕在化し、対抗的になることもあったし、現在でもあり得る。日韓の「無教会主義」コミュニティ

は、そうした状況下でも、植民地時代の歴史についての検討や、次の時代に向けた学生たちの生活体験活動などを行ってきた。これらは、東アジア諸国のキリスト教会で指摘されている「多文化主義」とは異なり、植民地時代から続いてきた葛藤を乗り越え、国家や民族の和解を目指す、政治的でもあり社会的でもある宗教文化交流であるといえる。このような文化交流路線は、しばしば韓国のキリスト教歴史研究者たちによって批判されたりもするが¹⁸、しかし、それは「反日」（もしくは反植民地主義）を主張した初期の朝鮮半島における「無教会主義」の政治的志向性に対するアンチテーゼでもある（徐2008）。

そうした現在の日韓「無教会主義」コミュニティの交流を、深く突き詰めて考えていくことで、反植民地主義的ナショナリズムから脱植民地主義的ナショナリズムへの転換の糸口をつかめるのではないか、あるいは元宗主国と植民地との間の宗教的な文化交流によって、相互の日常生活経験を理解し、過去の植民地経験の差を埋め、ポストコロニアル時代に向けた新たな思想や実践を構築することにつながるのではないと思われる。それは、東アジア各国においてときに目にする従来型の偏狭なナショナリズム、いわゆる「親／反」といった単純な二項対立を克服する道を示すことにもなると考える。また、この営為を人類学的研究と関連づけて考えてみると、東アジアで宗教文化交流が行われている現場に直接臨み、研究対象の生活世界を経験した上で、それを学術成果として発信するからこそ、現在の政治的・社会的情勢の改善に質する、現実的で有意義な提言が可能となるはずである。そのためには、現実の多様性をどう理解し、それを社会貢献にどのようにして結びつけていくのかに関して、共通認識を構築していく必要が東アジア人類学にはあると考えて

いる。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、資料収集や日本と韓国での現地調査に多大なるご尽力をいただいた、国際基督教大学の千葉真名誉教授と「日韓青年友の会」の代表の森山浩二氏に、この場を借りて御礼申し上げる。また、韓国

での現地調査では、韓国「無教会主義」の関係者のみなさまにお世話になった。みなさまのご協力を深く感謝申し上げます。最後に、韓国での滞在期間中、中国の延辺自治州出身の朝鮮族である金香順氏に、道案内や翻訳などを手伝っていただいた。改めて御礼申し上げます。

注

¹ 日本の近代思想家、内村鑑三（1861～1930）は、20世紀初頭に、教会組織を除き聖書を中心とするキリスト教を提唱した。それが「無教会主義」である。よく知られているように、西洋や日本による対外侵略を批判した内村の思想には、日本の知識階層を含む数多くの追慕者がいる（Caldarola1979、量1989、千葉1992）。

² 本文でも後述するが、朝鮮半島における「無教会主義」の活動範囲は、第二次世界大戦を境として異なっている。戦前・戦中は半島全域で活動が展開されたが、戦後は韓国に限定されることになる。

³ また、「抗日」ナショナリズムも、左派と右派に分かれていたという（木宮2018）。

⁴ さらに、木宮正史によると、冷戦終結後、こうしたナショナリズムのありようも変化している（同）。1960年代前半、南北体制競争において劣勢であった韓国は、日本の経済協力を得ることで挽回を図ろうと「用日」ナショナリズムに傾いた。その結果、地位の逆転に成功した。また、日本からすると、敵対勢力である北朝鮮に対抗するため、安全保障上、韓国の存在自体がきわめて重要であった。こうした、それぞれの国が抱いていた思惑は、冷戦終結時にある程度達成されたために、これ以上協力関係を維持する必然性がなくなってしまった。加えて、それまで非対称的であった日韓の関係性が、韓国の発展によって対称的となった。これらの結果、日韓双方とも、相互競争意識が増大することとなり、とりわけ韓国の対日ナショナリズムに関しては、日本を競争相手とみなすという意味での「競日」ナショナリズムという新たな側面が浮上してきたと、木宮は指摘する。さらに、この「競日」ナショナリズムは、「抗日」ナショナリズムの延長線上に位置づけられるものだとし

ている。

⁵ ここでの記述は、無教会史研究会（編）『無教会史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』（無教会史研究会（編）1991～2001）、秀村研二「20世紀韓国キリスト教の展開」（秀村2002）、さらに陶が現地調査の際に入手した資料をもとにしている。

⁶ 関根正雄（1912～2000年）は、無教会主義のキリスト者であり、聖書研究者でもある。東京教育大学で教授も務めた。

⁷ 本図は、webサイトの「百度地図」をもとに、陶が制作した（<https://map.baidu.com/>、最終閲覧日：2019年2月2日）。

⁸ ここでの記述は、無教会史研究会（編）『無教会史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』（無教会史研究会（編）1991～2001）、2007年8月19日に東京の「今井館」（本文で後述）で開かれた森山浩二による講演（演題「日韓無教会の交流」）の際に配布された資料、ならびに「今井館」が所蔵しているこれまでの『無教会全国集会プログラム』などをもとにしている。

⁹ ちなみに、1990年代に入ると、『梧桐文庫』の支援スタッフの高齢化、さらには後継者不足が顕在化してきた。

¹⁰ ここでいう「今井館」とは、NPO法人「今井館教友会」のことである。「今井館」は、内村鑑三が終生の事業として「聖書講義」を行った「今井館聖書講堂」の維持・管理、さらに内村と彼の影響を受けた人々の著作・諸資料の収集・保存を行っている。1971年に設立され、2001年にNPO法人に認定された。なお、ここでの記述は、「内村鑑三記念今井館教友会」のwebサイトを参照した（<http://www.imaikankyoyukai.or.jp>、最終閲覧日：2019年2月2日）。

¹¹ そうした刊行物には「無教会主義」の思想、日韓両国の「無教会主義」代表者たちの理解・認識、コミュニティの主要な出来事の報道や評価など

が掲載されている。

- ¹² 「無教会全国集会」は、「無教会全国大会」と呼ばれることもある。
- ¹³ その前身は、1933年12月に開催された『聖書朝鮮』の講習会であった。
- ¹⁴ 本章の内容は、陶が2014年10月と2015年10月に実施した現地調査の際に入手した資料によっている。
- ¹⁵ 洪洞面（町）には、96の自然村が含まれており、人口は2015年時点で4,826人であった。ここには、「無教会主義」集会を含め、8つのキリスト教の教会がある。ちなみに、洪洞面は、韓国における水田でのアヒル養殖法の発祥地であり、有機農業特別区の中核地でもある（Chungcheongnam-do, Chung Nam Institute (ed.) 2005）。
- ¹⁶ その時期は、韓国の「独立教会」に所属するクリスチャンも参加した1919年の「三一民族独立運動」の後であった。
- ¹⁷ 内村鑑三の2つの「J」の思想は、「失望と希望」と題された講演において初めて明らかにされ、1926年に『聖書研究』に掲載された論考「私の愛国心について」において文字に記された。内村の2つの「J」思想について、詳しくは、政池仁や高橋三郎・日永康の研究を参照されたい（政池1982、高橋・日永1987）。
- ¹⁸ 韓国のキリスト教歴史研究者たちは、韓国社会で一般的に見られる南北統一や日本に対する姿勢とは異なるとして、「無教会主義」のこうした活動を批判している。

参考文献

1. 出版物

- 赤江達也2013『紙上の教会』と日本近代』岩波書店
- 木宮正史2018『叢書東アジアの近代史4 ナショナリズムからみた韓国・北朝鮮近現代史』講談社
- 金 敬宰2006『韓国キリスト教会における公共信仰と私的信仰』稲垣久和（他編）『宗教から考える公共性』東京大学出版会2006
- 高橋三郎・日永 康1987『ルターと内村鑑三』教文館
- 千葉 真1992『内村鑑三——非戦の論理とその特質』日本政治学会（編）『年報政治学 政治思想における平和の問題』岩波書店
- 秀村研二2002『20世紀韓国キリスト教の展開』杉本良男（編）『宗教と文明化』ドメス出版
- 政池 仁1982『増補決定版 内村鑑三伝』教文館
- 無教会史研究会（編）1991-2001『無教会史 I、II、III、IV』新教出版社
- 量 義治1989『無教会の展開』東京 新地書房
- Caldarola, Carlo. 1979, *Christianity: The Japanese way*, E.J.Brill, Leiden
- Mullins, Mark. 1998, *Christianity Made in Japan*, University of Hawai'i Press, Honolulu
- ### 2. 資料
- 徐 正敏2008『韓国キリスト教史における無教会主義』歴史を学ぶ会（編）『韓国キリスト教史における無教会主義』
- Chungcheongnam-do, Chung Nam Institute (ed.), 2005, *East Asia Provincial Government Agriculture Forum*